

5/6月版

# 子どもへの寄り添うつ症状

「コロナ禍調査」家庭で抱え込む傾向

新型コロナウイルスの流

行が子どもの生活や健康に与える影響について、国立成育医療研究センター（東京）が調査したところ、小学校高学年から中学生の子どもの「うつ状態」といわれる症状が見られたことが五日分か

った。家庭内で抱え込む傾向も浮き彫りになり、相談者が「正しく理解し、SOSを出してほしい」と呼びかけている。

調査は二〇二一年十一月、無作為抽出の郵送と、任職のインターネットで実

施。小学五年生から中学三年生の子どもとの保護者

計約五千四百人から回答を得た。

その結果、郵送では小学

五年生22%と高くなつた。また、自分にうつ症状が出ても「誰にも相談せず自分で様子を見る」と答えた

（郵送調査）のは、小学五年生で25%、中学生で35%と、学年が上がるごとに抱え込む傾向があつた。

保護者への郵送調査では小学生13%、中

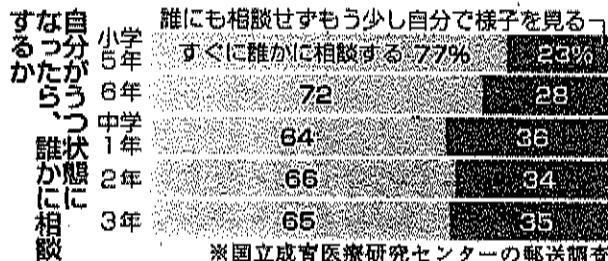
は、自分の子どもたちの症状が出た場合「病院は受診させず様子を見る」が29%だった。

同センターの森崎菜穂社

会医学研究部長は「コロナ

禍の長期化でストレスが高い状態が続ぎ、保護者も余裕がない可能性がある」と指摘。いろいろしている朝起きられなくなったり、サインに気付いたら「まずは子とも

の話を聞くことが大切だ。必要と感じたら、保護者はためらわずに相談や受診をさせてほしい」と話している。



する自分がうつ状態に相談するかたがうつ状態に相談する